筑前國續風土記　卷之三十目錄

土産考　下

百穀類　菜蔬類　藥品類
果蓏類　衆草類　諸竹類
群花類　海藻類　樹木類
蕈栖類

筑前國續風土記　卷之三十

貝原篤信　選定
貝原好古　編錄
竹田定直　校正

土産考　下

○穀　類

【稻】　筑紫米、いにしへより名産とす。就中肥後、筑前の米を佳品とす。飯として香甜（かうてん）なり。酒に釀（かも）して味あつし。國中最、上座、夜須を佳品とす。凡稻の品類甚多し。各名有。擧てかぞへ難し。○香稻二種有。味も香もよし。補益の性あり。地をゑらび、且取實すくなきとて、農人多く作らず。中華の書にも如此いへり。

【早米】　國中いづくにもあり。未熟なるをいり、おしひらめて果とす。性あしゝ。病人食ふべからず。凡早稻は性つよくして、病人にいむ。志摩郡波多江

村より、毎年六月に新米を國君に、献ず。長政公始て福岡の城を築き給ふ時、波多江の山伏一人土功をよくつとむ。長政公是をめぐみ給ふ。其年より彼山伏、其めぐみを感じて、早米をはやく作り出して献ず。その後年々例となりて、彼山伏の子孫今に毎年六月早米をさゝぐ。早米をうふる田地は宅中にあり。臘月或は正月初より種子(たね)を水にひたす。苗をうふる事早し。きじの尾と云稻なり。國君是を感賞して、毎年八木を賜はる。

【秈】 太唐米と云。土民はたうぼしといふ。近世異國より渡る。米の色赤く、粒小くして諸稻に異なり。味淡しといへども、性よし。積滯(しやくたい)ある病人用てよし。藥を丸する糊(のり)とす。又こがしとす。鳴(あひる)にかへば、よく卵を産す。もみ共にたくはへおけば、十年二十年も久しきに堪て、そこねず。此稻とり實(み)多く、飯多く、早くみのりて民用に利有。色白きあり。味おとれり。

【占城米】 陸田にうふ。粒大なり。

【粱】 大小品類多し。上座下座郡に多く作る。民の糧として、利用すぐれたり。

【大豆】 稻につぎて多く作る。秋大豆、夏大豆、黑大豆、其外品多し。夏大豆は早くみのり、舊穀すでにつきて、新穀いまだみのらざる時、民用を助く。

【蠶豆】 日かげ、木の下、下田、瘠土に作りても、よく榮えよくみのる。其實なりてそらに向ふ。故にそら豆と名づく。大和國に多くうへて、朝夕なら茶に加へて食す。飢を助けて、民用に利あり。其實大小あり。大なるをよしとす。

【眉兒豆】 篇豆の類也。莢ともに食す。近年異國より來る。

【穭豆】 野豆なり。つるあり。

【豇豆】 垣に蔓を引て、其莢白紫有。白くして緑紫なるあり。何もさや長し。又蔓なくして、圃にうふるあり。其實、黑、白、赤三種あり。蔓あるも、なきも、

いづれも性よし。本草にのせたり。蔓なき豇豆、小環豇豆あり。莢の形まがりて、環のごとし。味は常の豇豆に同じ。又近年ゐんげんさゝげ有。もろこしより來る。ひらくして實白し。早くみのる故、一年に二度みのる。

黍稷　蜀黍　玉蜀黍　穆子　胡麻白黑　赤小豆　大麥類品多し。小麥　扁豆　刀豆　豌豆　白豆　蕎麥等品類多し。

○菜蔬類

【牛蒡】遠賀郡高井村に產するを好品とす。同郡底井野の近邑なる故、底井野牛蒡と稱す。國君より毎年江戸に献ぜらる。筑後の北野牛蒡に似たり。又下座郡長田村に產する牛蒡味美也。那珂郡山田村、怡土郡井原村の產亦よし。

【芋蕷】薯蕷に似て甚大なり。世俗あやまりて何首烏と稱す。非なり。何首烏は近年異國より來る。別の物なり。

【油菜】國中處々に多くうふ。就中上座下座に多し。其實を取て商ものとし、博多の町にて油を搾り、又

大坂に上せひさぐ。

【菘】 京菜と云。其類多し。根、葉、蕊皆食す。夏菘あり。

【蘿蔔】 大根の類多し。三月大根、糯大根 赤大根、伊吹大根など有。地によりて味厚薄あり。近年、又、春大根、夏大根多し。秋冬の産尤よし。

【水蘿蔔】 平原の圃に自然に生ず。甚多し。春初とりて其根を鹽につけ、菹となして食すれば、からくして味よし。蒸て食し、煮て食すれば、和にして味よし。又大なるをほしてもよし。

【胡蘿蔔】 根に黄白二色あり。黄を良とす。性よし。乾ても食べし。葉も亦食す。又野胡蘿蔔あり。味おとれり。

【芹】 處々に多し。就中下座郡徳淵、穗波郡柳橋、志摩郡櫻井村の産味尤よし。又柳芹あり。尤よし。山芹あり。つれの芹にかはれり。味似たり。

【蕪】 京菜に似て別種なり。すはり蕪甚大なり。怡

土、志摩郡に多し。べにかぶも恰土郡に多し。

【壺盧】ゆふがほ、ふくべ、ひさご、百なり、千なり　長ゆふがほなど、其品多し。

【薯蕷】山中處々にあり。深山より出るもの尤長大なり。ほして山藥とするによし。畿内、江戸には圃に作る。山にあるを自然生と云。尤賞翫す。又つくねいも、うぢいもなどいふものあり。食して味よし。圃に作るべし。

【胡荽】臭あしゝ。然ともよく物の惡臭を去る。臭あしくして、よく惡臭を去る。めづらし。小兒の瘡の邪氣にふれて色あしきに、此煎湯を身にぬり、壁にそゝぐ。魚鳥の料理にも用ゆ。唐人多く用ゆ。八月にうふ。

【草石蠶】日陰、木の下にもよく繁昌す。食すべし。又飢をたすく。甘露子とも名づく。毒なし。

【葱】ひともじ、本名はき也。和訓一字なる故に、ひともじとも云。其類多し。大葱有。小葱あり。小

葱にもかりぎ、わけぎあり。わけぎは冬葱なり。かりぎは夏葱なり。又あさつき有。是尤小葱なり。

【南瓜】 九月に至りて熟す。若きは味よからず。老たるがよし。春まで久きに堪ふ。性よく、味よし。猪肉と同じく、食してよしと、本草等の書に見えたり。唐人はこのんで食す。此物、昔は日本になし。寛永の初に、唐土より來る。又南京南瓜あり。南瓜の類也。頸あり。味似たり。南瓜に紅青あり。青きが味尤良。

【藜】 若き時葉を菜とす。老大なる莖を杖とす。唐の書に、杖レ藜といへり。

【地膚】 枝しげきを帚とす。葉は菜とし食す。干してもよし。莖は杖とす。又南蠻帚あり。枝葉多くして、うるはしといへども、莖よわくして、帚ににすれば折やすし。

【黄瓜菜】 春月、水田の中に生ず。つみて、飯の上にてむして、飯にませて食す。味よし。

【蓼】 大小數種あり。大にして葉ちゞめるは、彥たでと云。彥山に多し。鹽につけてよし。唐たでは葉の色紫にして大なり。小蓼より辛きことうすくして、かへつて味よし。

【芋】 處々に多し。濕をこのむ。數種有。青芋、黑芋、つるの子あり。つるの子に二種有。大つる、小つると云。大つる尤よし。山圃に多くうえて、飢を助く。民用に利有。野芋は毒あり、食ふべからず。圃にうへても、三年になれば毒あり。水邊に生ずるにも、野芋あり。食ふべからず。

【白芋】 其莖白く大にして、食すべし。市に多くうる。熱湯につけて後は乾ても食す。味よし。其根は甚寒氣をおそる。

【大芋】 上座郡より出。甚大なり。根の味よし。ほら芋と云。法螺貝に似たる故なり。莖葉赤芋に似たり。莖も食す。

【赤芋】 處々にあり。其莖赤く大なり。食するに堪

たり。市に多くうる。其根の味亦よし。常の芋より子すくなし。

【栗芋】 其葉蓮葉に似、其根の形も、味も栗に似たり。味よし。生にて食へども、ゑぐからず。山中濕地に宜し。

【蕃椒(たうがらし)】 其品近年多し。此物性熱なり。辛く烈(はげし)といへども、宿食を消し、胃口をひらき、魚毒をころし、心腹寒痛をとゞめ、下血を治し、冷積結癖(れいしやくけつべき)をやぶる。其功亦多し。然ども氣を上せ、熱を助け、氣血をへらす。不レ可二多食一。諸本草には見えず。時珍食物本草注、遵生八牋、唐詩畫譜等近年わたる書に出たり。秀吉公朝鮮をうたれし時、彼國より來る。故に高麗胡椒といふ。

【茼蒿(しゅんぎく)】 菜として食す。味よく、性も亦よし。花また頗見つべし。

【土圍兒(ほど)】 蔓草なり。三葉あり。山中處々にあり。根圓にして線(すぢ)ありて、多くつらなれり。一根をほる時は、土中をたづねて、數顆を得。甘くして美なり。

土民鐵器をいむよしいへり。

【莧】白莧あり。赤莧あり。まだら莧あり。白莧を上品とす。旱歳に尤滋生す。

【藤夫蓼】處々深山に多し。其實の形二あり。一はひらく、一は長し。ひらきは殊に食すべし。ひらきにさねなし。一物にして、實の形二ある物珍し。

【萵苣】白苣萵あり。赤萵苣あり。長ちさ有。清緑にして葉大なるに、五六月まで久しくさかふるあり。味尤よし。赤きは毒あり。又紅毛ちさあり。

【獨活】畿内にてうどゝ云。此國人はしかと云。只少なるめだちをうどゝ云。處々山中に生ず。其苗初て生ずる時尤賞す。莖長きもよし。また煮て切ほして食す。味よし。其根を煮て食し、ほして食す。あへ物として、味ことによし。性も亦惡からす。

【蕨】處々の山に生ず。殘島に殊に多し。苗の莖、生なるは性あしく。干たるは生よりよし。秋月邑より出る物、大にして味よし。凶年には、春、其根を

ほり、粉をとりて食にあつ。性はあしゝ。貧民春は家をいで、山中に入て假屋を作り、一月許わらび葛根をほり、餅となして食し、飢を助く。民の飢を救ふには、葛よりまさる。又糊として、器をはるにより。

【薇】深山幽谷の内、處々にあり。わらびに似て、甚大なり。芒ありて味苦し。煮て食す。又ほして食す。尤よし。

【紫箕】わかきを取て食す。或鹽につけ、又ゆびきて、ほしてよし。其根をたゝき水飛する事、葛わらびの粉の如にす。わらびの粉に、味も性も增れり。

【絲瓜】若き時菜とす。性あしからず。老たるは浴巾とす。又なべ釜器を洗ふによし。

【鶏腸草】春月生ず。食すべし。

【苦菜】冬春生長ず食すべし。毒なし。然れども今食する人まれなり。月令に記せし若菜是なり。

薤　甜菜　野蜀葵　薺　繁縷　蒲公英　馬齒莧

慈姑　烏芋　菠薐　水萬苣　萍蓬草

右の外猶菜類多し。あげて記し難し。

○藥品類

【鶴虱】　天名精とも云。葉は腫物を治し、折傷をいやす。妙藥なり。見知ておくべし。野にも、林中にも多き物なり。たばこの葉に似たり。其實はくさし。藥とす。

【紅花】　上座、下座、鞍手郡の境圃等に、多く作て利とす。藥とし、紅粉とし、染色とし、其苗若き時は食す。味よし。實は油とす。其用多し。麝香をいむ。べに染の衣服に、麝の氣ふるれば色かはる。

【茯苓】　處々山中より出。秋月の奥江川に多し。白茯苓、堅くして、純白なるを良とす。又茯神あり。

【蓮肉】　蓮は處々の池にあり。紅有。白あり。一處にうゝれば、白きは枯る。多くうふれば、民用に利あり。蓮根は鐵器をいむ。根、葉、花、實、蕊皆用ふ。蓮蕊は花のしべなり。藥とす。近年唐蓮を多

くうゝ。其品亦多し。

【芡實】 處々の池に生ず。鞍手郡植木村の池に尤多し。おにはすと云。實は藥に用ゆ。性よし。又紛となして食す。其實の苞の形、鷄の頭に似たり。故に鷄頭實と云。

【沙參】 處々に多し。葉は杏葉、又は桔梗に似たり。俗にとゝきと稱す。其花小にして、すゞの如し。延喜式太宰府貢物に人參を載たり。然ども今は人參なし。凡延喜式にしるす所の貢藥は、多くは和藥ならん。然らば人參といへるは、沙參なるべし。本草を按ずるに、張潔、古は沙參を以て人參にかへ用ゆ。證類本草に、餘州人參とあるは、沙參なり。是中華にも、沙參を人參と稱す。然ば延喜式に載る所の人參は、倭の沙參なるべきか。凡日本には人參にかへ用る物多し。沙參、羊乳根、萎蕤の外はいづれも宜からず。用ゆべからず。ふし人參と云物、此國にも處々多し。味苦くして、性あしゝ。是を用ゆべから

す。近年上方にはやる人參と云物あり。遠賀郡白島にあり。木防風也。人參として用ゆべからず。性あしゝ。

【羊乳根】 是も沙參の別種にて、性も同じ。人參にかへ用ゆべし。處々の山中にあり。蔓人參と云。其花沙參より大にして、つりがねに似たり。故に又つりがね人參とも云。本草綱目沙參の條下に見えたり。其蔓紫色にして三葉あり。其ある處、人の手ふれざれども、其香まぎれなし。まことに藥草と云べし。怡土郡瑞梅寺山に產するは、其根まるし。里にうふれば枯やすし。

【薏苡仁】 藥とし食とす。粥にして食す。葉は茶に加へ煎す。香も性もよし。むねを開き、食をすゝむ。又粒大なるあり。藥とするに堪ず。民俗つらぬきて數珠とす。

【常山】 本草を考ふるに、二種あり。一種はくさぎと云。樹大なり。其葉をほして、賤民是をあつ物とし、あへ物として食す。性よからず。一種は茶の葉に似たり。小木なり。くさし。此一種常山、此地稀

也。住吉村邊にあり。二種ともに藥に用ゆ。

【前胡】 野だけと云。山に多し。

【龍膽草】 處々山野にこれあり。秋、璃瑠色の花さく。花もみつべし。りんだうと云。

【牽牛子】 花青、白、紺、赤色々有。其實黑、白有。藥とす。又油とす。一種小あさがほあり。

【蔓荊子】 志摩郡など所々海邊に多し。

【海金沙】 村野に多し。蔓草なり。

【天南星】 二種あり。一種は莖斑にして、蒟蒻のごとし。一種は芋の葉の光の如し。三にわかる。赤き實有。二種共に用ゆ。冬春の初根を取。毒有。共に林中に在。

【草麻子】 藥とし、油とす。民用に益あり。毒有。不可食。

【栝樓】 根も核も藥に用ゆ。實の若き時、鹽漬とす。瓜のごとし。核は栝樓仁なり。根をたゝきたる汁、水飛して天花粉とす。餅とし、食して饑饉を助く。

二種あり。一種牛ごうりと云は、性あしく用ゆべからず。玉づさは又別なり。王瓜と云。

【枸杞(くこ)】 から日本二種あり。性すぐれたり。實は藥とす。葉はほしても食す。又茶とす。唐くこ尤よし。和枸杞もからにあり。本草に見えたり。枸杞の皮、地骨皮と云藥なり。

【五加木(うこ)】 根の皮を藥とす。五加皮と云。葉は食す。苦し。性よし。ほしても食す。又茶とす。味甘きもあり。ひめうこきと云。鬼うこきあり。葉大なり。五加皮酒、中風によし。

【防己】 つゞらに作り、かづらとし、繩のごとくに用ふ。民用を助く。山中に多し。

【冬葵】 小あふひと云。其根は藥に用ゆ。花はよからず。又錦葵あり。花紅紫にしてよし。是は藥に用ひず。

【艾葉】 處々田野に多し。就中竈門山に產するをよしとす。伊吹山の產に似て長大なり。凡もぐさは、

若き時とるを良とす、と醫書に見えたり。三月三日、尤よし。五月五日にもとるべし。

右の外　當歸　川芎　藁本　地黄　麥門冬　天門冬　山梔子　紫蘇　葛根　荆芥　細辛　香附子　香薷　白扁豆　木通　車前子　玄參　苦參　菖蒲　栢子　茴香　白芥子　商陸　瞿麥　金銀花　白茇　茵陳　紫苑　金佛草　桑白皮　木賊　決明子　益母草　澤蘭　黄精　牛膝等の藥種、みな當國にあり。悉く擧がたし。

○果　蔬　類

【棗】　長きとまるきと二種あり。大なるを樂に用ゆ。熟したる時取て、日によく干て後、むして干べし。後にもをり〳〵日に干べし。然らざれば蟲食ふ。熟せざれば性惡し。朝鮮棗は、實大にして茶を入る漆器に似たり。故に其器をなつめといふ。形似たれば也。紹鷗利休等が書る物には、なつめ形（がた）といへり。後人は略して只なつめと云。朝鮮棗、今此地にも種を傳へ

てうふ。

【銀杏】 上座郡に多し。雄木には實ならず。三角なる實をうふれば雄木となる。うふべからず。小兒に食はしむべからず。飢人是を粮(かて)として多く食へば、腹はりて死す。性よからず。

【柿】 種類甚多し。擧てかぞへ難し。其木沙土に宜しからず。赤土に宜し。殊にこねりは沙土にあしゝ。こねりを又大和柿とも御所柿とも云。大和の御所と云所の產、味よくして多く出る故に名づく。京都にてはこねりと云。大和柿御所柿とはいはず。秋月山中に產するこねりは、其味畿內の產に近し。木ざはし柿處々に多し。此國にては木ざはしを木ねりと云。色々あり。形も色々、味もかはれり。又秋月に小(を)谷柿とて長き柿あり。甘ぼしにして味甚美なり。

【梨】(一本によりて載す) 其品多し。消梨、雪梨など云もあり。山中に宜からず。早良郡片江村神松寺より出る梨、其味尤よし。故に其梨の名をも神松寺と號し、上品とす。

【大栗】所々にあり。赤土に宜し。砂地に宜しからず。

【杭栗】又しば栗と云。小栗なり。山野に甚多し。貧民是を用て、飯にかへて食を助く。春初野山をやく時、其柴もえつきて、やがて若はえ生じ、夏長じ秋實のる。毎年かくのごとし。

【懸鈎子】山中所々に多し。四月に實熟す。

【覆盆子】草いちご是也。此國にては、くはんすいちごと云。實大にして、甚あまし。性よし。

【蓬蘿】冬いちごとも云。葉大なり。

【蕣田蘆】田野に在。蔓有。五月の頃實のる。性よからず。小兒好んで食す。

【唐苺】葉も實も大なり。味淡し。實の色黄なり。園裏にうふ。山野にはなし。異邦より近代來れるなるべし。

【楊梅】國中所々に多し。糟屋郡左谷村の枝村、梅が浦と云所にある一株大木也。其木の本めぐり一丈

五尺有て、四方に扶疎たり。其實の大なる事、梅のごとし。味甚甘美なり。

【榲桲】 實は梨のごとし。味すし。花なし。榲桲をまるめると訓ずるは誤なり。

【吉利子樹】 冬月花開け、三月に實熟す。食ふべし。百果のさきがけ也。白の木といふ。伊賀にてはこしきぐみと云。

【椎】 所々の山に多し。長きとまるきと二種有。性あしゝ。

【櫻桃】 花も實も、小にして愛すべし。四月に熟す。百果の先がけ也。枇杷より早く熟す。性は惡し。山櫻桃有。には梅と云。

【山梨】 秋月にあり。大なるかづら也。其實梨に似たり。是獼猴桃なり。本草に出たり。

【山椒】 所々山中にあり。其皮もきざみて食す。但皮をはげば木かる。朝倉山椒有。又冬山椒あり。葉大にして冬かれず。實は常の山椒に同じ。犬山椒あ

り。食すべからず。

【茱萸】三種あり。名は、しろぐみ、ひぐみ、いひぐみと云。

蜜橘　柑　橙　金橘　柚　包橘　花柚　佛手柑

此類、皆國中所々に多し。就中蜜橘は、怡土郡淀川村に產するをよしとす。是を淀川蜜橘と云。同郡井原村に多し。是又好品なり。又志摩郡御床村に大なる橘樹あり。其樹の枝葉の及ぶ所、東西七間二尺、南北八間二尺有。又博多に多し。案ずるに、三代實錄仁和三年正月二十九日の條下に云、太宰府より小柑子を例貢す。十一月三十日以前を以て、貢進の期とす。是よりさき、期限をたてず。故に今これを定むとあり。然れば古もこの國より、小柑を獻ぜしにや。凡橘柑の類、甚寒氣をおそる。故に朝鮮に生ぜず。又京都及北陸道、信濃、上野、下野などの寒國にはこれなし。但柚のみ生ず。此國の中にも、上座郡の山中、其外所々山中寒谷にはこれなし。植れ共

榮えず。後には枯る。柚は此國の山中にも宜し。土地の宜かはれる事、かくのごとし。又朱欒あり色々に品多し。夏蜜橘有。橙に二種有。だい〳〵あり。かぶす有。かぶすは蔕のだいなし。

【胡桃】 あり。

【榛子】 直方にあり。

【葡萄】 處々にあり。多からず。

○衆草類

【鼠麴草】 民俗に上鵜ぶつと云。此地の土民、艾をふつと云。黄花ひらく。春其葉をとりて、もちにつきませて食す。よもぎにまされり。むかしは、三月三日の餅にも、是を用ひしよし、古き書にあり。性もよし。

【薊】 小あざみ、あへ物として食す。味よし。鬼あざみあり。又さは薊有。食すべし。小也。

【吉祥草】 和俗觀音草と云。大葉、麥門冬に似たり。

【蘿摩】 其葉を食す。味よし。性甚よし。其生葉を

もみて、手にぬれば、惡臭をさる。干してたけば、糞などの惡氣をさる。實は小兒食す。此地にてはがぶなと云。

【荇菜】 所々の池に生ず。蓴（ぬなは）と一類にてかはれり。葉のわれたるは荇なり。花黃なり。

【睡蓮（すゐれん）】 葉は荇葉に似たり。花は白き八重にして、蓮のごとし。日中に花をひらきて、水上にうかび、未の時よりは、花ねぶりて水中に入故に、睡蓮と云。處々池に多し。

【蓴菜（じゅんさい）】 所々の池に生ず。食すべし。葉まるく、少長く、莖は氷のごとくなる物あり。鹽につけ置て食するもよし。性よからず。冷也。

【青蒿】 秋まで色青し。香よし。神麯に用ゆ。

【黃花蒿】 青蒿に似たり。あやまつて是を青蒿としやすし。辨すべし。

【烟草（たばこ）】 烟草は人家常用の物なれば、作る所多し。就中遠賀郡內浦村に作るをよしとす。內浦烟草と云。

【覇王樹】 京都にてはいろへろと云。葉もなく、實もなし。異物なり。寒をおそる。

【濱木綿】 はま芭蕉と云物也。二種あり。宗像、志摩の海邊に多し。おもとに似たり。三熊野の浦のはまゆふ百重なると、人丸の歌にもよめり。百重なるとは、莖の皮幾重にもかさなれるものなれば也。

【虎杖】 大なるを杖とす。わかき時、小兒食す。

【珊瑚】 葉は蜜橘に似て莖長き事二尺餘、秋冬赤き實なるうるはし。日をおそる。日陰にうゝべし。山林の中にあり。

【だんぢく】 海邊に多し。薪とし、垣とし、枝とす。筍は惡瘡を治す。他藥を加へ用ゆ。甚妙藥也。生なるはわりて魚をあぶる架とす。やけず。鐵橋に同じ。

【落葵】 若き時、煮て食す。實紫色なり。

【鴈足】 深山の中にあり。鳳尾蕉に似たり。好事の者、是を立花の具とし、床頭の珍とす。

【白屈菜】 其葉よく腫物を消す。花黄なり。

【知風草】 所々にあり。芒に似たり。此草の莖に節あれば、其年必大風吹く。本にあれば春ふく。中にあれば夏ふく。其次の中にあれば、秋ふく。最末にあれば、冬大風ふく。一所に二あれば、二度ふく。此事唐の書にも多く出づ。日本の俗にも又稱す。

【蘭草】 野にあり。ふぢばかまと云。是眞蘭なり。いにしへ蘭といへるは是なり。澤蘭に似たり。醫方には用ひずといへ共、性よし。

【茜草】 穗波郡益木山、飯塚、上座郡山中、其外所所にあり。

【蒴藋】 處々にあり。馬にかへば馬の病を治す。接骨木の葉に能似たる故に名づく。

【草薢】 所々の山中に多し。就中夜須郡秋月の邑に產するもの、大にして味よし。又きところ有。食するに堪へず。

【雲實】 毒あり。處々にあり。葉はさいかしの如く、蔓を引て木のごとし。其花口に近くべからず。

【格注草】 毒あり。山中に所々に多し。かりて垣とす。わらすゝきより久に堪ふ。正月に、是を以て歳首を祝す。もろむきと云。

【王瓜】 根を用て粉とし、餅とす。飢を助く。天花粉のごとし。實は瓜に似て紅なり。さねは菓とす。薬には用ひず。是を括樓仁に稱するものあり。あやまり也。

【蕺菜】 俗には毒のよしいへ共、本草には菜類に入たり。駿河、甲斐國、山中の村民は、根を取、飯の上にてむして、朝夕食す。味甘し。又十薬と云。

【羊蹄根】 腫をいやし。癬疥を治す。一種葉丸きあり。別に又酸模と言物あり。賤民是を用て酢とし、なますを作る。

【蘡薁】 國俗からみと云。和名いぬゑひ、蒲萄に似たり。其實を取て酒に作れば、性よし。其葉をほして、もんでもくさとし、いぼ、あざ、ほくろなどに灸すればおつる。

【蒲】 塘に多し。莖をとりて席とし、垣とす。花は蒲黄なり。藥とす。

【卷栢】 所々山中にあり。

【松蘿】 さるをがせとも、ひかげのかづらとも云。蔓草也。

【苦瓜】 つるあり。實の色は錦の如く、形は瓜の如し。荔枝に似たり。小兒食す。

【菱實】 池の中に在。其實は煮て食す。又粉として餅とす。飢を助く。性は不好。

【松房】 山中に生ず。蔓なり。木の如し。楊枝とす。齒の藥なりと云。唐の書にていまだ見ず。松氣あり。

【風蘭】 山中にまれにあり。

蓍 萢葵 芭蕉 鱧腸草 龍葵 鼠尾草 酸漿草

石長生 虎耳草 蕁麻毒草也 曼陀羅花 石龍芮 毛良毒有 獨頭蘭 猫草 鷄腿兒草

此外雜草國中に多し。擧て記し難し。又無名の野草多く、見しりたる草はまれなり。

○諸竹類

【竹】眞竹はからの書に苦竹と云。皮まだらなり。白竹は淡竹といふ。淡紫也。白竹の筍味尤よし。眞竹の筍より早し。大竹は苦竹の大なるなり。大竹は各郡に在といへども、上座郡山中に產するは尤大なり。小竹は又女竹と云。何の所にも多し。筍苦し。白竹、紫竹、斑竹、矢篦竹、大名竹、孟宗竹あり、南京竹、きん竹、此二種は垣とすべし。紵子は竹の實なり。近年南京竹、異國より來る。是義竹なるべきか。筍は食するに堪へず。○凡筍を食するに、取たる日、食ふによし。若は翌朝食すべし。日をふれば味おとる。筍を養るに、他の物をまじえず、一種を養るべしと唐の書にかけり○又胡麻、生薑、竹の子の毒をけす。竹やぶに胡麻かすをすつれば、來年竹の子を生ぜずとからの書にいふ。

○群花類

【牡丹】福岡士大夫、及福岡傳多の富人の家、花師

の園、寺院の庭にある所の牡丹、好品甚多し。此國の土地牡丹に宜しき故にや、諸州に勝れて好品多し。好事の家には、年々實を種て異品を生ず。當時天下に牡丹を賞翫甚盛なる故に、諸州に是を愛す。就中好花あるは、筑前を第一とす。白を最上とし、紅是についで好品なり。紅白の中亦品類多し。紅白の外雜色甚多くして幾程といふ事をしらず。其賞紅白におとれり。

【芍藥】 是又佳品多し。凡芍藥は藝州廣島を天下第一とせしか共、今は此國の芍藥まされりと云。

【菊】 是又佳品甚多し。其上品は五菊、七菊など云、て其品類有。博多はいにしへ、唐船の着し所なる故唐より初て此地に來りし故にや、古歌にも菊を博多にて讀り。然れば博多は菊の名所とすべし。博多鵝毛と稱する名菊は、諸國にも賞す。

【蘭】 好事の家に多くうふ。數種あり。場師(大きし)是を植て賣る者あり。

【梅】 白梅、紅梅、一重、八重、諸品甚多し。城下に數十種あり。肥後梅と稱するは其花實大なり。又豐後梅といふも同じ。是亦多し。又消梅(しなのうめ)あり花も實も小し。聖福寺・大乘寺・箱崎赤幡坊の紅梅皆其木大なる事類すくなし。其花盛なる時は美觀をきはむ。近年中華より綠萼梅(りょくがくばい)渡り、此國にもあり。是梅の上品なり。

【櫻】 八重櫻、品類甚多し。城下士人の宅、處々にあり。山櫻は處々山林に多し。

【彼岸櫻】 櫻花より十日先だちて花開く。熊谷櫻あり。小木に八重の花さく。櫻より早し。

【絲櫻】 城下士人の宅、往々多し。箱崎妙德寺のいと櫻其木尤大なり。彼岸櫻と一類也。彼岸櫻の臺につげて生長しやすし。海棠の類にはあらざれども、もろこしにいはゆる、垂絲海棠(すゐしかいだう)といふ物、是なるにや。

【桃】 紅桃、白桃、金銀桃(えどもも)、垂絲桃(しだりもも)、緋桃(ひたう)、八重桃など品多し。油桃(つばいもも)といふ物あり。其實つばきに似たり。一作桃(いっさくもも)あり。實をうへて當年花さく。年經て花

いよ〳〵多し。冬桃あり。十月に熟す。

【海棠】 眞海棠は、其實林檎に似て小也。食すべし。花尤よし。からかいだうと云。からより渡れる木なり。南京と浙江との二種あり。山海棠は尤おとれり。是は本邦にもとより有。

【石楠花】 山中處々にあり。就中那珂郡南面里村の上の山に多し。黑赤土に宜し。沙地に宜しからず。里の砂地にうゝれば、枯やすし。

【庭櫻】 小木なり。山櫻桃の千葉也。實なし。花白くして、愛すべし。淡紅なるも有。いとよし。

【躑躅】 大小霧島、其外紫つゝじ、黃白品類甚多し。山つゝじは山中處々に多し。紅あり。紫あり。高山には二三間許の大木あり。又杜鵑花あり。躑躅と一類別種なり。躑躅花落ちて後さく故に、さつきつゝじといふ。亦品類多し。

【棣棠花】 八重、一重あり。八重を良とす。又白きひとへあり。是も八重におとれり。鎌倉山吹と云あり。

花大にしてよし。木も高し。又草山吹あり。花よし。

【水仙】 千葉あり。單葉あり。單葉を金盞銀臺といふ。是をよしとす。

【山茶】 其花、紅白、單葉、千葉、八重あり。其品多くしてかぞへがたし。玉島つばき、南京つばき、此等常品にかはれり。山にあるは皆一重也。椿をつばきと訓ずるは、誤なり。

【茶梅花】 花白し。又淡紅、深紅なるもあり。海紅と云。尤よし。十月より花咲て、二月におはる。花の間久し。

【迎春花】 小木なり。冬の末より黄花開く。土につかざるに根生ず。故に土につけば、早く生じやすし。

【瞿麥】 やまとなでしこは、山野に多し。大なり。紅白まじれり。又純紅なるもあり。からなでしこ、小にして夏秋色々の花咲く。又おらんだ石竹あり。洛陽花あり。とこなつの花と云も、石竹の事也。久しくある故なり。

【桔梗】 處々山野に多し。藥とす。花は一重にして、瑠璃色也。園中にあるは青あり。白あり。八重あり。かさなれるあり。

【鐵線花】 又風車あり。相似たり。

【芽子】 冬春の間、かりて薪とす。又垣とすべし。民用に利あり。又宮城野萩あり。家園に植う。花尤美なり。

【えびね】 黄白數種あり。園中にうゝ。秋月の山、遠賀郡手野村の山に、種々のゑびね多し。

【茶靡花】 菊いばらとも云。春の末に咲花なり。故に古詩に開到茶靡花事了と作れり。

【鷄冠花】 其品多し。南京鷄頭、錦鷄頭など云をよしとす。五月に咲ける花、十月末まで殘る。凡花の久しくあるは、是を第一とすべし。百日紅、茶梅花など、久しく花有といへども、かはる〳〵咲つゞく。一花は久しからず。只鷄冠花のみ同じ花久しく堪ふ。

【百合】 品類甚多し。花の美なる物多し。藥には。

花白きを用ゆ。又おにゆりを卷丹(けたん)と云、煮て食す。味よし。白花は味苦し。山丹(ひにゆり)あり。

【玫瑰花(はいくわい)】 此花うるはしくして、香甚よし。色紅なり。又白花あり。京都にては、まなすと云。赤き大栗ほどなる實あり。此地にて、はなたち花といふ。

【秋牡丹(たうぎく)】 葉は牡丹に似て、花は紫菊に似たり。近代異國より來れるにや、名付て唐菊又高麗菊と云。然ども山城攝津國の山に多し。然ば日本に古より有之。九月に菊に先だちて花さく。

【秋海棠】 此花むかしは日本になし。正保年中、唐土より來る。和名なし。陰地を好み、日をおそる。實をまけば、翌年より花さく。

【臘梅】 小木なり。葉は柿に似て高さ三四尺に過ず。一窠(ひとかぶ)より叢生す。十二月に小なる黄花をひらく。其香蘭の如し。京、大坂にては、らんばいと云。花の形は見るにたへず。近年からよりわたる。根より小枝多く出るは、正月に切去べし。

【佛桑花】 花牡丹の如く大なり。千葉也。いばらの類也。四月より咲て八月に終る。

【木芙蓉】 紅白、單葉、千葉あり。秋花さく。蓮に似たり。

【熊谷】 敦盛、兩種相似たり。山中にあり。奇花なり。里にうゝれば枯る。

【薔薇】 類多し。八重にして紅なる有。白きあり。淡紅あり。ひとへにして紅なるあり。四時花さく。ひとへにて白きあり。又月季花あり。毎月花さく。

【檀特花】 葉は芭蕉に似たり。花紅なり。寒をおそる。五月より咲く。十月に至りて花あり。是亦久し。實は蓮肉の如し。美人蕉も此類なり。是は此地になし。檀特花は多し。

【玉簪花】 毒あり。二種あり。一種は朝鮮ぎぼうしと云。葉大なり。一種は、さぎ草と云。花葉ともに小なり。

【白丁花】 此地にて、ばんていし、京都にては白丁花

と云。漢名しれず。四月に小花を開く。二種あり。一種は阿蘭陀白丁花といふ。

【下津毛】 叢れる小樹なり。一窠より莖多く生ず。冬は皆かるべし。其新莖早く生ず。花は淡紅深紅有。尤よし。日光下津毛と云、盆にうゝるもよし。根をわかつべし。さしてもつく。

【笑靨花】 是亦一窠より多く叢生す。春小圓花ひらく。花多く重りて内くぼし。

【金絲梅】 二月に花さく。山吹に似て、長き蕊あり。六月に葉莖ことゞくかれて、來春まで只根のみ土中にあり。花頗よし。

【金絲桃】 葉は柳のごとく、末まろくして桃に似たり。花黄にして、蕊長し。五月に花ひらく。小樹なり。

【木槿】 品類多し。其内好花あり。見るに堪たり。正月にさすべし。よく活く。あさがほと訓ず。萬葉によめり。

【山礬】 正月に花さく。香あり。七里香といふ。小樹なり。濕をいむ。

【旋覆花】 單葉あり。千葉あり。はびこりやすし。

【黃蜀葵】 花よからず。紙をすくに、このねばりを用ゆ。とろゝと云。

【鐵色箭】 夏水仙と云。花よからず。

右の外花草花木猶多し。あげて記しがたし。

○海藻類

【神馬藻】 鹿角菜に似て長きちいさき實あり。其色うす黑し。甚うるはしき藻也。食すべし。但甘草を服する人は食すべからず。相反す。性はあしからず。古歌に、引津の邊なるなのりそとよめり。今も志摩郡の海濱に產す。老たるを、ほだはらと云。正月に春盤の上におく。なのりそと名けし意、日本紀にあり。本草には是を海藻と名づく。

【索麪苔】 宗像郡地島に多し。其外大島、志賀、姫島にも生ず。索麪の如く、長くして色黑き藻也。味甘

し。是を取、鹽に醃し、或灰に和して、干貯て用ゆ。

【裙帶菜】 大島、志賀島、大蛇島、其外島々、海濱に多し。就中地島、そねの瀬に產する物、殊に勝れたり。

【紫苔】 所々の海濱にあり。味甘し。故にあまのりと云。出雲國十六島苔も是に相似たり。

【海羅】 所々の海濱の石に付て生ず。ちいさき時羹として食す。其味甘して脆し。是を小ぶのりと云。其大なるを水に洗ひ、日に干し、貯置て用ゆる時、煮て糊とす。民用多し。

【末滑海藻】 大島に多く產す。故に俗に大島をば、かじめの大島と云。賤民其乾たるを刻みて、羹に入れ食す。甚ねばる。

【海藴】 島々海濱所々に多し。是春時に、藻の新に生ずる也。長じて藻となる。

【河藴】 所々小流にあり。就中怡土郡高祖村の小川、井原村の松井川、嘉摩郡庄内川、早良郡飯盛川に多

し。海蘊に似て其色青く、絲をつがねたるがごとく、形うるはし。羹として其味又よし。但小瘡を發し、身を痒からしむ。病人食すべからず。此藻、北に向つて流るゝ川ならずば產せずと云。海藻に非ずといへども、藻類なればこゝに記す。

【石帆】 志摩郡宗像郡の大島など處々にあり。黑黃赤三種あり。異物也。

海苔、海松、鷄冠苔、鹿尾菜、凝草、海髮、毒あり。不可食。又一種うけうどゝ云物、此類なり。色紫なり。是亦毒あり 龍鬚菜、經紐、おごのり、さめのり。

此外、海草甚多し。悉く記し難し。凡凶年に貧民海草を取て食とする事、野草より多し。

○樹　木　類

【薪炭】 國中薪をとる山は、あげてかぞへがたし。福岡博多に近くして持出てうるは、早良郡のおく、石竈、曲淵、脇山、內野、小笠木、怡土郡飯場、那珂郡岩戸の數村、糟屋郡篠栗、萩尾、久原、若杉、

須惠、穗波郡八木山、内住等也。炭をやく所も亦多し。炭は鞍手郡犬鳴山より、近年多く出づ。七月は薪炭殊に多し。江川より鍛冶炭多く出づ。

【材木】 材木の多くして美なる事、上座郡佐田山を國中第一とす。次に鞍手郡犬鳴山、大賀畑山、穗波郡相田山、夜須郡秋月山、怡土郡高祖山、早良郡荒平山等也。近年は多くきりて、材木すくなし。

【松】 國中の山野平原に多く松を產す。其中に松原と稱する所凡八所有。箱崎生の松原、早良郡百道松原、糟屋の地藏松原、花見の松原、那多の松原、那珂郡志賀の松原、遠賀郡岡の松原なり。此外にも猶小なる松原あり。就中生松原、箱崎松は古歌に詠じて其名高し。長政公鳥飼鹿原村の北百道原に松を多くうゑさせ玉ひ、廣く茂りて箱崎につげり。又地藏松原も同時にうゑさせ給ふ。○松葉 松の多き所、落葉甚多し。かき取て薪とす。民の利用多し。箱崎の松葉殊に大に長くして秋後色よし。數奇屋の庭に敷用ゆ。

江戸へも南海の舟路をこして、國君の露地にしかる。

【茶】 千光歸朝の時、茶の實を持來て、早良郡背振山幷博多聖福寺の内に栽う。其時栂尾の明惠上人にも贈らる。明惠是を栂尾の深瀨の園にうゝといふ。千光明惠傳記に見えたり。日本には其前より茶を用、茶園もありといへども、唐の茶の實を日本にうゑ初めたるは、千光明惠なりといふ。年中行事歌合の判にも、茶はおほやけの、もてあそび玉ふ物にて有ければ、いにしへより禁中にも茶園侍る也。中ごろ栂尾の何上人とやらん、茶をうゑはじめたるよし申すは、ひがごとにて侍りしといへり。今當國の内、背振山下板屋村、同山つゞき五箇山に茶園多し。又秋月の江川、上座の山中にも多く產す。

【檜】 國中處々にあり。正月にさしてよくつく。生長しやすくして、民用に利あり。

【杉】 國中いづれの郡にも多し。就中上座郡小石原村の山中に產する所の杉、其大なる事五圍にあまり、

節なく直にして美材也。他國においていまだかつて見ざる所也。船を作り檣とするに殊によし。但其木理直にさけず。故に桶桛とするに堪ず。若杉山にも多し。

【綾杉】 槽屋郡香椎村、神功皇后の御廟の前にあり。古歌にも讀り。其枝葉常の杉と甚かはれり。香椎の社條下に詳也。

【黄楊木】 秋月古所山に多し。用て櫛とし、琵琶の撥とす。又柞あり。是又櫛とすべし。犬つげに似たる小木有。びんかゞりと云。材用とならず。

【安石榴】 酸と甘きと兩種あり。又花の千葉なるあり。實なし。

【欅】 上座郡山中に產す。又槻あり。一類二物なり。

【楠】 國中所々に大木多し。其大さ數圍に及べる木多し。嘉摩郡下中益村北斗の社の側にある楠、國中第一の大木也。十五抱あり。其空所方二間餘あり。たゝみ八疊を敷くべし。此國にかぎらず。諸邦に於ていまだ見ざる大木也。又糟屋郡宇美宮にも大楠あり。

凡くすの木二種あり。

【比々】 ほろめかしと云木也。榧の木に似たり。山中にあり。實はひらし。油あり。伊勢には此油をとり用ゆ。

【柳】 數品あり。楊柳尤うるはし。柳は早く長ず。さして長じやすし。多くうゑて薪とすれば、民用に利ある事、唐土の書にも見えたり。又器に作る。牙枝とす。

【鳳尾蕉】 處々園中に有之。一種番蕉あり。矮小にして、一根より數株生ず。盆中に植て清賞とす。凡そてつは寒國には宜からず。故に北國になし。京都にうゑてもさかえず。枯やすし。

【莽草】 處々山中に多し。抹香とす。就中早良郡西油山の農人多く是をうる。毒あり。食すべからず。實にも毒あり。小兒をいましめて食はしむべからず。

【鹽麩木】 漆に似て、葉よく紅葉す。又はじの木あり。ぬるてに似たり。是又紅葉す。

【椋子木】 其實秋熟す。味甘し。毒なし。小兒好で食す。其葉用て器をとぐ。木賊のごとし。

【桂】 たぶの木の葉に似たり。皮は藥とすべし。

【たぶの木】 畿内にて、たもと云。二種あり。桂の類なり。實に油あり。蠟燭とす。

【衞矛】 二種あり。矢をはぎたる如く枝に羽あり。鬼箭とも云。藥に用ゆ。秋冬紅葉す。日かげにあれば紅葉せず。一種錦木に似て、羽なくして紅實なる木あり。

【楢木】 山中にあり、枝なく針多し。其めだち、あへ物として食す、味よし。毒なし。

【榎木】 處々に多し。薪として能もえ、烟少し。老人保養のため、燒火を好てあたる人、これを薪とす。

【山茶料】 藻鹽草に和名を、はたつまりと云。又令法と云。山中にある木也。貧民其葉をとりて、飯にまじへて、蒸て食とす。味頗よし。飢をたすく。又ふしぐろと云物あり。飢饉をたすく。

【罌子桐】 桐の木に似たり。其實をとりて油とし、燈油に用ゆ。或漆として器をぬる。其法あり。是をうるて利とす。實に毒あり。食すべからず。國俗あぶらせんと云。民用に利あり。

【白楊】 鞍手郡吉川山にあり。器材とすべし。葉は桐の葉に似て小也。木の理は柳に似たり。京都の扇箱にする桐は是なり。故に、はこやなぎと名づく。

【木犀】 城下の士宅に、大木處々にあり。秋花さく。其香遠くかほる。是又桂の類なりと本草等にいへり。

【歷木】 山中處々にあり。薪とし、炭とす。

【茅栗】 竈門山にあり。葉は栗のごとく、實は椎に似たり。

【辛夷】 正二月に白花ひらく。赤き實有。大木あり。

【梅もどき】 高四五尺あり。六尺に過ず。冬に至りて實赤し。見るに堪たり。山中に在。庭にうつしうう。地惡ければ實ならず。

【接骨木】 たづの木とも云。木はうつぎに似たり。

葉は蒟蒻の如し。

【南天燭】 肥土にうゝべし。冬に至りて實紅也。見るに堪たり。山中處々にあり。

【女貞】 黑き實あり。

【冬青】 二種あり。一種は、とりもちなり。一種はなゝみと云。高き木なり。紅なる實なる。葉も實もうるはし。

【檍】 あをきとも、あはぎとも云。葉大にして棗の如くなる實なる。冬赤し。萬年枝と云。葉をば外治に用ゆ。木は象牙の紋のごとし。

【空木】 花は卯の花と云。卯月に花さく。木は細工に用あり。花千葉なるもあり。

【椿】 むかしは、日本になし。近年宇治の萬福寺に、もろこしより初て渡る。今は此國にも多し。香椿と云。漆の木の葉に似たり。少香あり。萬福寺の僧は、すひ物の香頭にする。其木早く長じ、根より苗多く生ず。多くうゑて薪にすべし。又材となる。木理も

よし。根の皮は藥種に用ゆ。椿根皮と云。椿の字昔より日本に誤て、つばきとよむ。つばきは山茶花也。右の外ちしやの木、槐、槲、ゆすの木、いちひの木種々多し。擧てつくすべからず。

○蕈類

【松蕈】 怡土郡高祖山、早良郡荒平山、穗波郡合屋山、大分山、糟屋郡宇美山、秋山、嘉摩郡大隈山、夜須郡秋月山、菩提寺山、下座郡屋形原、堤村、柿原村、遠賀郡三好村等にあり。其外の山には產せず。日を經て久しきと、味善きとは食ふべからず。毒あり。古人松より生ずるもの、皆よしといへり。松蕈、松露、金だけなど、皆松より生ず。蕈の上品なるべし。

【松露】 白砂の地に松葉の液おちて生ず。故に雨後に多し。黃白二種あり。白を上品とす。性平にして毒なし。其氣香しく美味也。然れども久きにたへず。新きを良とす。ほして食す。又鹽につくれば、久しく損せず。當國八所の松原及志摩郡小金丸、糟屋郡

花鶴松原に多く産す。花鶴、那多兩所の松露甚大なり。其大なるは六寸、七寸圍有。香も亦かうばし。此國には松林多き故、他國より多し。春冬二度あり。夏秋はなし。沙地の松林の内には皆産す。山上の松下にも稀に有といへども、毒あり。食すべからず。

【金菌】八九月、山野に産す。松露に似て莖あり。其色黄にして、いさぎよし。故に金だけと云。松林のある所、山上沙地ともに生ず。故に松氣あり。味美なり。毒なし。

【紅菰】其色べにのごとし。毒なし。處々山中に産す。

【蘑菰】山中の木より生ず。

【香蕈】處々深山の中、林中の木につきて生ず。松蕈の外、蕈の類の上品なり。ほしたるもよし。

【柳たけ】柳より生ず。

【初たけ】八九月、山野に多く生ず。其色深緑にして、銅青の如し。食すれば脆鬆にして、味よく、毒

なし。

【舞(まい)たけ】 處々山中、地中より生ず。鼠色也。

【鼠たけ】 處々山中にあり。地に生ず。其色鼠毛のごとく、其形大なる針に似たり。又白色、黄色あり。毒なし。

【針たけ】 春月、原野に生ず。其形大針の如く、長一寸餘あり。褐色なり。味は鼠蕈に似たり。

【しめぢ】 糟屋郡宇美山、夜須郡秋月及山隈原、鞍手郡直方などにあり。一種相似たるもの、煮て色黑く變ずるは、毒あり。食すべからず。

【石茸(いはだけ)】 御笠郡竈門山、夜須郡古所山に産す。大岩につきて生ず。あやふくして取にくし。性すぐれてよし。虚を補ふ。

【木耳(きくらげ)】 處々山中に多し。木によりて、性善惡あり。

【土栗】 松露の如くにして少くひらし。又栗に似たり。二月、四月の間生ず。煮て食す。味木茸の如し。本草其外、諸書にていまだ見ず。故に性しれず。養

生を慎む人は食ふべからず。況味もすぐれざるをや。

【靈芝】 五色あり。紅紫黑此三色多し。國中處々に生ず。食品には非ず。又松木に猿の腰掛と云物生ず。靈芝に似たり。

【いくち】 裏黃にして刻なし。陰地に生ず。皮を去て食ふ。味も性もあしゝ。食ふべからず。

【鹿の玉】 大なる菌也。寒月、山中の朽木に生ず。内に細條多し。形は塊の如し。味宜しからずといへども、土民食ふ。水を多く吸ふ。凡くさびら、きのこ毒あるもの多し。みだりに食ふべからず。

筑前國續風土記卷之三十 大尾